

ミケちゃんのシュリンプサラダ

岡本 悠

洋は、陽気な午後に、過ごしていた

昼飯は、いつも、このファミリーレストラン！

1人で来る

もう、ビデオ屋も潰れたし、

本屋も、なくなってしまっていた

ちょっと、遠いけど

仕事場からは近い

ここで、食べるのは、たいていは、シュリンプサラダ

サラダの上に、エビが乗っている

洋の食べ方は、

サラダを制してから、最後にまとめてエビ3匹である

元々は、暇つぶしに本などを持って

コーヒーゼリーのアイスを食べていた

けんごう、さんが、接客してくれた

時には、月に1度は、3000円程度のサーロインステーキを食べた

ミケちゃんと、親しく話したのは

店の男の客同士のケンカからだった

「大丈夫ですか？」

と、聴くと、慣れた口調で笑っていた

よくあることかもしれない

ミケちゃんは少しだけ小柄で

茶髪の、かわいらしく、美形な女性

ミケちゃんの他には、けんごう、さんや、女性の店長などがいた

洋は、ミケちゃんの笑顔が好きだった、明るいし、

最初の頃は、ミケちゃんの注文に

「シュリンプサラダを」と、頼んでいたが

慣れてくると

「いつものでいいですか？」

と、俺の確認をとると、笑った

俺は、帰りのレジの時、必ず

「ごちそうさまです」

と言った

そしたら、ミケちゃんは

笑顔で

「ありがとうございました」とか

「いつも、どうもありがとうございます」

と、言ってくれた

ここは、俺のアイランドかと思った

別段、恋をしているわけではないのだが、感触が好きだった

それに引き換え、下の薬屋の1人の女性店員の態度は最悪だった

洋は「この人、早く辞めてくれねえかな」

と思っていた

ポカリスエットや、お茶を買うのには、一番手っ取り早い店だった

午前中に行く日もあった

すると、ミケちゃんは、1人の女の子を連れて、客として現れた

子供がいたんだ！

洋は、チラチラと様子を見たが、あまり見ないように、気を遣った

俺は、このファミレスの近くに引っ越したが、

あまり、派手にお金を使いたくなかったので、

最初の頃は、行かなくなってしまった

ステーキも、最近はもっと安い、近くのファミレスで食べている

水曜日の午後の仕事の前、つまり、朝食で

また、通い出した、

俺もコンタクトレンズにしたし、だいぶ、痩せた

けんごう、さん、は、普通に対応してくれたが

違う女性店員は、

「お久しぶりです」

「痩せました？」

「メガネも変えて」

「かっこいい」

などと、言ってくれた

ただ、ミケちゃんはいなかった

タイヤヤで買い物をした、帰り道

明らかに、ミケちゃんという人物が

こっちを見ていた

俺は、「なんで最近来ないんだろう？」

と、思っているのかな？

と勝手に思った

また、違う時にも

ミケちゃんの後像を追いかけた

そして、新しい家から少し出た場所で

自転車に乗っているミケちゃんとすれ違ったが、ミケちゃんは気づいたか、気づいてないか、はわからなかったが、素通りして行ってしまった

正直、社交辞令でもいいから、何か話したかった

ミケちゃんの自転車は、ママチャリで、後ろには子供が乗っていなかった

俺は、仕事も辞めてしまったので、

朝食の必要性もなく

また、朝食の時間はミケちゃんも働いていないはずなので

そのファミレスにはまた、行かなくなっている

正直、ちょっと行きづらいという気持ちもあるが

別に行けなくもない

ただ ミケちゃんがいないと行く意味がないし

いたら、いたで、失敗した時、表層が崩れるという意識も働いてしまう

だから、行かないのだ

ヒュルリーラ、ヒュルリーラ

花びら舞い散る 記憶舞い戻る

ミケちゃんは、もう、ファミレスの仕事を辞めてしまったのだろうか？

さくら、が、舞う、春だった...

「完」